

女の日時計

田辺聖子



女の日時計

田辺聖子

読売新聞社

おんなひどけい
女の日時計

昭和四十五年十二月十五日 第一刷
昭和五十六年十月二十四日 第十刷

著者 田辺聖子

編集人 守屋健郎

発行人 大原規男

発行所 読売新聞社

東京都千代田区大手町二の七の二 一 千 100
大阪市北区野崎町八の十 一 千 530
北九州市小倉北区明和町二の十二 802

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 ナシ・ナル製本

定価 八〇〇円

©, Seiko Tanabe, 1970

0093-700671-8715

目

次

乾いたくちびる	七
海の薔薇	三一
妻の座	五七
花曇り	八四
ヘッドライト	一一〇
海辺の町で	一三六
露の芝	一六二

夏足袋

一八八

深淵

二一四

女のいる場所

二三九

女の年月

二六五

女の席

二九〇

あとがき

三一七

装丁 重原保男

女の 日 時 計

乾いたくちびる

一

沙美子^{さみこ}は三面鏡の中にうつっている冬空があまり美しいので、化粧を終えてからも、しばらく、見惚^{みど}れた。

青い、それでいてするどくない、どこかやわらかみを湛^たえた深い空の色は、阪神地方特有のものである。明るい鏡の中には、さえざえした緑の松林が、薄むらさきの六甲連山をうしろにしてつづき、母屋^{おむや}の屋根瓦^{やねがわ}が木がくれに見えていた。

午後、それも夕暮れまでにはまだ少し間のありそうな、こんな時刻、奥まったこのあたりの高級住宅街には絶えて物音もない。ただ明るい光がみなぎっていて、いんとしている。

今日は早めに帰るよ、と朝の出がけに、夫の敬一が言っていたので、沙美子はいつもより早く家を片づけ、身じまいをしておきたかった。いずれ母屋から呼び出しのベルが鳴ることであろう。

夕方、母屋で義妹の恵子のお見合いが行なわれるはずなので、数人の来客がある。沙美子も接待を手伝わされるに違いなかった。

今朝、玄関で敬一がひとりごつのように、

「恵子のやつ——このへんで片付いてくれたらええのになあ」

と、靴をはきながらいったが、沙美子は何もいわず、ほほえんでうなずいてみせただけだった。

誰が聞いているというのでもないが、義妹のことに關して——いや、義妹だけでなく、夫の家族のことについてうっかり口を利いたら、どんなことになるか、今までの経験で、沙美子にはよくわかつているのである。

一年前に沙美子たちが結婚したとき、邸内の一角に、若夫婦のための新居が建てられた。母屋とは離れているし、世帯は別だし、こちらの方にはお手伝いさんもないので、夫婦だけのおしゃべりは、夫の家族にはきこえないはずなのに、奇妙に筒抜けになってしまう。

さりとて、夫がいうわけではもちろんない。それなのに、

（お嬢^{ねえ}さんは、こない思うてはるやろけど——）

（沙美子さんはこれこれなんですて、なあ）

などと、義妹たちや姑^{しゅうとめ}からチクチクとした口調でいわれ、沙美子はいたずらをみつづけた子供のように、恐縮する、というよりはぼかんとしてしまふことがよくあった。

（何も言わへんほうが、ええのやわ——）と、この頃^{まづ}では沙美子は思っている。結婚してはじめての頃は、沙美子は何でも夫に一部始終を話さずにはいられなかった。今日はこんなことをお姑^{かあ}さまにいわれた、恵子さんに言われた、穂子^{むすこ}さんがこういった……夫は、かなり辛抱強く聞いていたらしいが、だんだん、不機嫌^{ふきげん}な眉^{まゆ}の表情になつてくるのがわかった。

それでも沙美子に向かつて怒るといふのではない。彼には罵^{のの}詈^りのボキャブライがないらしく、せいぜい不快な、辛^{つら}そうな、ゆううつな顔をしてみせるだけで、沈黙して、さつさと寢室^{はし}へ入り眠^いつてしまふ。

沙美子は、そんな夫が不満だった、しだいに、夫の家族のことは口にしなくなった。

沙美子が不満や不快を口にせず、色に出さず機嫌よくしていれば、夫の敬一も愉快らしい。敬一は三十になったばかりだが、年のわりには角^{かど}がないという評判である。おだやかで、

沙美子には優しい。新婚の頃から変わっていない。

沙美子は会社の番頭たちが（いや、いまは専務や部長などと鹿爪らしい名前をもらっているが、昔風には番頭や手代の感覚である）、

「大旦那さんは強うてワンマンやけど、若旦那さんはおっとりしてはるな、ほんまに、ほんんいうとこや」

と噂しているのを知っている。

皮肉やいやみを言ったこともなく、ウソをついたこともなく——まじめでまっとうで——いかにも、二百年つづいた造り酒屋の若旦那という風格で、おうようだった。

（敬一さんがええ人やさかい、あんたも辛抱せな、あきません）

と実家の母に言われてから沙美子は、自分の中のどろどろしたみにくい憤懣や、負けん気や、反撥を、生のまま夫にぶつつけるのは、ひかえるようにした。ぶつつけたところで、夫が苦しむだけで、ひいては自分も不快になるだけだと悟るのに、一年かかった。

母屋は大家族である。

舅と姑、義弟の章二。義妹の恵子、毬子の二人はまだ、それぞれ二十四と二十二で、嫁入り前だから家にいるのは当然だが、結婚して近くに片付いている珠子という、敬一のすぐ

上の姉が、子供連れでたえず家に入り浸っている。

母屋と離れの連絡にはベルがあつて、姑のせつは沙美子と呼ぶときはベルを鳴らす。

そのたびに沙美子取るものも取りあえず、という恰好で走ってゆかねばならない。これはお手伝いさんの部屋にあるのと同じベルであつた。

——親類の誰さんが見えてますからご挨拶を……。

——珠子が買ひ物にいくそうだから、子供たちを見ていてやつてちょうだい。

ことごとにつけて呼ばれるので、実質上は同じ屋根の下に住むのとかわりはないのであつた。いや、それ以上に気疲れしてゆううつである。

——沙美子さんは、ええお家へ嫁かはった。

結婚のときに親戚の誰かれに満足そうにいわれたが、沙美子はこの頃では、心の中で、

(いつでも、かわったげますわよ)

とおどけて舌を出している。

いや、はじめの頃から、権高なこの婚家には抵抗を感じるものがあつた。

酒銘「初桜」、二百年つづいた造り酒屋の榎原家の若夫人として、沙美子は迎えられたわけであるが、沙美子のつもりでは、敬一という一人の青年と結婚したはずなのが、いつか、

いやおうなく、敬一もろとも、ガチッと「旧家」の重臣のなかに組みこまれてしまっている。（ええおうちへいかはった）というようなものではなかった。

榊原家は夙川の山手の、奥まった町にある。

坂の上の一面に、城のような石垣をめぐらし、カイヅカの深い緑の植え込みがその上に繁って、長々とつづく。垣の下は小川になり、山からの清水が流れていて、城の濠のように生け垣の緑をうつしている。

松、樟などの植え込みの向こうに、建ってから百年以上という古めかしい母屋があり、威丈高な大門はびたりと閉ざされ、新年とか、冠婚葬祭の時でないといひらかれない。

その代わりに、最近、車が出入りできるように作られた鉄柵の門が横手にある。そこから白い砂利道がS字形につづいて、築山をめぐって豪壮な玄関へとみちびいてゆく。中世の要塞のような、城館といった方がふさわしい邸宅である。

沙美子の実家は、船場の呉服問屋だった店も、その住居も、戦災で焼失して、それからの建物だから、ずっと新しいものだった。

小さくはないが、ここの婚家ほどぎょうぎょうしくなく、それにふんだんに光の入る明るい洋館で、芝生の庭も親しみやすく、両親も兄妹もにぎやか好きだった。来客が多く、それ

も家族たちの楽しみの一つで、たのしい雰囲気だっと思っている。店は船場に再建したが、住居は大阪市の南はずれにうつして、あたりにはすぐ下町がつづいていたから、そのせいもあつたのだろう。つくろわない町の気風がそのまま、家の中へはいりこんでいるようだった。

しかし、この榊原家はちがう。戦災を受けていないということは、特異な気風を昔ながらに伝える温床になるのだった。町そのものが、戦争も知らず時代のうつり変わりも知らず、何十年かわることなく大邸宅がひっそりと並んでいるのである。昼間でも死のように静まり返った町。

もうこれ以上、手入れするところがなくて、どこもかしこも、出来上がったものを守ってゆくだけのとりすました美しい町だった。沙美子は実家の感じとくらべてみて、何かもうひとつ、婚家の物々しいたたずまいになじめないのはそのせいである。

母屋で暮らしていないせいか、榊原家のヨメという気はまだ切実に感じられないのであった。鉄柵の門入って車が砂利道を右へとり、離れの小さな洋館の前にとまると、ホッとする。間借りの嫁、とでもいうのかもしれない。

しかし沙美子は、このあたりの自然と静寂は好きであった。どうかすると駅前マーケット

のスピーカーから風につて流行歌のきこえる、実家とちがつて、ひねもす、しんと静まりかえった奥ふかい町。風の肌ざわり、樹々の匂い。桜の花と樹々の緑が市松模様に町を染めあげてくる春。松の花粉が風に流れて来たり、蟬しぐれが降るようだったり、燃えるように紅葉する樹が垣の内から梢をのぞかせていたり、四季折り折りに美しい自然を、沙美子はどう、一年見て過ごしたわけである。たまに実家に帰って、（ゆっくりしてきなさい）と敬一に許されても、二晩と泊まったことはなかった。

（お姑さんに気がねするのやろ）

実家の母はふびんそうにいうのであるが、沙美子は、やはりそそくさと、「取りすました」よそよそしい町にかえってくる。抵抗を感じながらも婚家の大きな花崗岩の石垣の内の人になると、何かしらホツとするという、矛盾した気持ちになる。それはもしかしたら、やはり夫への愛のひとつかもしれない。

町の美しさも、自然や風光のめでたさも、敬一というやさしい夫のそばにいて、はじめて身に沁しみる情緒になって感じられるのであろう。煩わづわしい家族関係の中で、二十四の若い沙美子がなんとなく一年を過ごして来られたのも、敬一がいればこそかもしれない。

みちたりたような、物うい気持ちで沙美子が鏡台を離れると、車の音がした。二階のこの